

入学者選抜*

尾 島 昭 次**

はじめに

本白書の対象期間である昭和47年から現時点（53年3月）までの医大入学者選抜の背景をなしていた状況を総括してみると、おおよそつぎのようにいえるのではなかろうか。

医師不足一主として開業医の収入の飛躍的増大—医科大学（医学部）への志願者の殺到—戦後経済の高度成長の末期—国私立医大急増（無医大県解消を目標）—私立医大の膨大な寄付金入学—石油ショックを契機とした不況時代—学力試験一本勝負の歪—国公立大共通第一次試験と連繫した医大選抜改革への取り組み。

以下いくつかの項目に分け、医学校選抜の実態を資料に基づいて記すこととする。

1. 医学校数・入学定員

表1のように医学校ならびに入学定員の増加が昭和47年度においてピークを示したが、私立医大の新設は不況と規制措置により昭和50年度以降0が続いている。

2. 倍率

倍率を昭和47年度から同53年度にわたり、国立一・二期、公・私立に分け表2～5に示し、昭和50、53年度については志願者、入学者（定員）の実数も記載した。資料の都合により、公・私立は合格者に対する倍率、さらにそれらの47～49年度は受験者の合格者に対する倍率（実質倍率）である。

前回の白書⁹⁾に記された昭和45年度、同46年度の倍率も含め、その推移を図1に示す。国立一期は昭和45～46年度の約8倍から53年度は約6倍にやや漸減し、劇的な変化はみられなかった。同二期は4群中、つねに飛び離れて高率を示したが、48年度の約28倍をピークとして53年度は約20倍にやや低下した。53年度における国立大の

表1 医学校数・入学定員（対前年度増加数）^{1,2)}

年度	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53
国立	0	1	0	1	3	3	1	2	0	3
公立	0	0	0	^{△1}	0	0	0	0	0	0
私立	0	3	2	7	1	2	0	0	0	0
計	0	4	2	7	4	5	1	2	0	3
入学定員	60	340	340	880	600	640	180	200	0	320

^{△1} は国立移管による減を示す

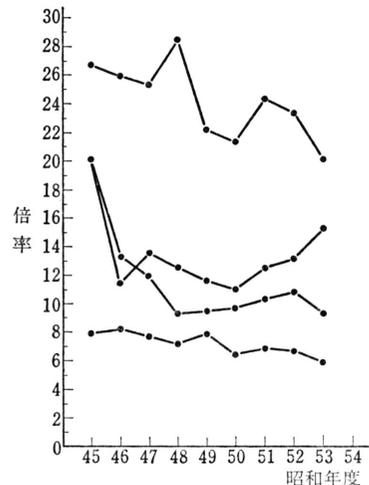


図1 医学校における入学者選抜倍率の年次推移

注：昭和47、48、49の3か年の公・私立に関しては、表4、5の倍率（実質倍率）を平均欠席率（公立は約2割、私立は約1割）により修正し、50年以降同様、志願者／合格者の倍率として表わした

これらの低下は、54年度より実施される共通第一次試験への対応の結果とみられる。すなわち、現行制度のうちに、一般に科目数の少ない私立大に入学しておこうとする受験生の意図から、後に記すような私大への殺倒となったものであろう。

公立大と私立大はずっと国立一期と二期の中間の倍率

* Student Selection in Medical School of Japan.

** OJIMA, Akitsugu 岐阜大学医学部病理学教室

表 2 国立一期校の倍率^{2,3)}

大学名	昭和47年度			48	49	昭和50年度			51	52	昭和53年度 ³⁾		
	志願者	入学者	倍率	倍率	倍率	志願者	入学者	倍率	倍率	倍率	志願者	定員	倍率
北海道	727	103	7.1	6.2	6.6	789	119	6.6	8.1	8.2	825	120	6.9
東北	872	117	7.5	6.7	6.1	609	114	5.3	5.6	6.2	592	120	4.9
筑波(49) [△]	—	—	—	—	6.0	882	99	8.9	8.2	10.0	761	100	7.6
千葉	1,304	100	13.0	13.1	8.7	1,243	116	10.7	11.9	11.6	1,252	120	10.4
東京(理三) [△]	754	90	8.4	7.6	7.5	755	90	8.4	7.6	8.4	732	90	8.1
新潟	916	100	9.2	8.7	8.5	978	119	8.2	7.7	7.4	649	120	5.4
富山医科薬科(51)	—	—	—	—	—	—	—	—	6.1	5.9	566	100	5.7
金沢	734	120	6.1	6.1	4.0	630	120	5.3	4.0	4.3	536	120	4.5
浜松医科(49)	—	—	—	—	36.6	753	100	7.5	15.6	11.3	942	100	9.4
名古屋	591	98	6.0	6.3	6.6	656	106	6.2	5.0	5.2	453	100	4.5
三重(47)	626	99	6.3	11.9	8.8	749	100	7.5	8.2	8.5	910	100	9.1
滋賀医科(50) [△]	—	—	—	—	—	592	100	5.9	7.2	5.8	575	100	5.8
京都	655	100	6.6	5.5	5.7	794	122	6.5	6.4	5.8	664	120	5.5
大阪*	677	99	6.8	5.3	5.0	504	98	5.1	6.1	5.9	478	100	4.8
神戸	832	101	8.2	5.9	6.5	667	117	5.7	5.6	6.2	553	120	4.6
鳥取	831	100	8.3	7.7	6.7	775	120	6.5	5.4	4.4	530	120	4.4
島根医科(51)	—	—	—	—	—	—	—	—	8.7	9.1	681	100	6.8
岡山	684	97	7.1	5.9	5.6	663	120	5.5	5.0	4.4	483	120	4.0
広島	1,208	99	12.2	9.5	6.8	771	118	6.5	5.7	5.8	571	120	4.8
徳島	862	100	8.6	7.7	7.3	953	120	7.9	8.4	9.0	762	120	6.4
九州	501	106	4.7	4.5	4.5	548	122	4.5	4.7	4.8	475	120	4.0
長崎	707	122	6.0	6.7	5.4	551	114	4.8	4.3	4.7	582	120	4.9
熊本	773	105	7.4	6.8	5.7	771	117	6.6	5.8	5.9	620	120	5.2
佐賀医科(53)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	545	100	5.5
大分医科(53)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	729	100	7.3
計・平均	14,254	1,856	7.7	7.2	7.9	15,633	2,351	6.5	6.9	6.7	16,466	2,770	5.9

[△] 2段階選抜校 * 学士入学実施校(昭和50年度より専門課程へ20名) () 内は設立年度

を示してきた。昭和45年にはいずれも20.1倍であったが、その翌年にともに約13倍および約11倍に激減し、翌年いずれもやや戻ったが、5年間で約半減した。減少し始めた時期は私立医大の新設がスタートした時期に丁度一致している(表1参照)。私立医大新設がピリオドを打った50年度よりふたたびやや増大し、現行入試の最後の機会である53年度に上述の理由により急上昇した。

個々の大学別にみると、国立一期校では、千葉大が過去7年間でいずれも最高を記録し、49年を除き10倍を超過した。国立二期校では東京医科歯科大がいずれの年度においても抜群に高く、51年度の56.9倍はすべての大学中の最高であった。公立は10倍前後で大学間に大差を認めがたく、横浜市立大の昭和52年度の23.3倍は例外的とい

えよう。私立大には、慶応大(40倍台)、日本医大(20~30倍)など高いものから、川崎医大(約3倍)、愛知医大(3~4倍)、金沢医大(3~4倍)などの低いものまで、大学間にかなりの差が認められた。

以上、医学部の入学倍率は、医科大学が約倍増した現時点においても、なお他の分野に比べ依然として高く、学力的に最難関といわれている。裏を返せば、学力検査一本勝負の現行入試の歪——学力偏重の高校以下の学習生活によってもたらされた歪——が医学部志願者にもっとも強い可能性を否定できない。しかし実際は、医師には学力のほかにパーソナリティや体力が要求されるのである。共通一次試験を契機として、入試を改革しようとする動きが他の分野に比し、医系に比較的強いのは、

表 3 国立二期校の倍率

大学名	昭和47年度			48	49	昭和50年度			51	52	昭和53年度 ³⁾		
	志願者	入学者	倍率	倍率	倍率	志願者	入学者	倍率	倍率	倍率	志願者	定員	倍率
旭川医科 (48)	—	—	—	16.9	13.8	1,476	100	14.8	30.9	26.9	2,359	100	23.6
弘前	920	120	7.7	14.5	23.5	2,585	120	21.5	25.1	27.6	2,418	120	20.7
秋田 (45)	2,125	84	25.3	28.1	18.2	1,338	90	14.9	20.3	16.9	1,457	100	14.6
山形 (48)	—	—	—	38.8	28.0	3,537	101	35.0	20.0	33.6	2,507	100	25.1
群馬	2,760	100	27.6	34.8	14.9	1,463	100	14.6	17.7	17.3	1,323	100	13.2
東京医科歯科	3,566	72	49.5	23.3	21.9	3,548	80	44.4	56.9	45.6	3,167	80	39.6
信州	2,205	100	22.1	18.8	19.6	1,699	100	17.0	21.3	20.0	1,468	100	14.7
岐阜 [△]	2,028	77	26.3	32.8	22.0	1,882	79	23.8	19.7	23.0	1,484	80	18.6
山口	3,050	90	33.9	30.6	20.0	2,185	119	18.4	18.6	23.5	2,111	120	17.6
愛媛 (48)	—	—	—	37.6	35.4	2,891	100	28.9	25.9	22.4	1,889	110	18.9
鹿児島	2,076	98	21.2	24.1	15.1	1,600	119	13.4	12.0	12.1	1,178	120	9.8
宮崎医科 (49)	—	—	—	—	16.8	3,002	100	30.0	27.3	31.7	2,564	100	25.6
高知医科 (53)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2,595	100	26.0
計・平均	18,730	741	25.3	28.4	22.1	27,206	1,208	21.3	24.3	23.3	26,520	1,320	20.1

[△] 2段階選抜校

表 4 公立の倍率

大学名	47*	48*	49*	昭和50年度			51	52	昭和53年度 ³⁾		
	倍率	倍率	倍率	志願者	合格者	倍率	倍率	倍率	志願者	定員	倍率
札幌医科	9.2	8.5	6.7	868	100	8.7	6.8	8.4	793	100	7.9
福島県立医科	14.7	9.5	13.5	625	82	7.6	10.3	11.1	846	80	10.6
横浜市立	8.9	8.1	10.2	699	63	11.1	23.9	23.3	870	60	14.5
名古屋市立	12.2	13.3	14.4	951	87	10.9	9.3	11.5	783	80	9.8
京都府立医科	10.5	9.7	7.5	925	102	9.1	10.9	9.5	1,049	100	10.5
大阪市立	5.9	5.8	6.0	697	81	8.6	8.3	8.5	611	80	7.6
奈良県立医科	26.5	9.6	10.4	765	60	12.8	7.8	7.4	1,095	100	11.0
和歌山県立医科	7.3	10.0	7.6	598	60	10.0	7.6	6.8	509	60	8.5
計・平均	11.9	9.3	9.5	6,128	635	9.7	10.3	10.8	6,556	660	9.3

* 実質倍率 (受験者/合格者)

そのような状況に基づくものとみられる。

3. 2段階選抜

共通一次試験と関連し54年度より2段階選抜 (いわゆる足切り) がクローズアップされてきた。しかしそれはすでに現行入試においても実施されており、表6にその実態を示す。

東京大学は志願者が総定員の5倍以上の場合、岐阜大学医学部は1,200名を越えた場合は、いずれも「学力試験に先立ち、出身高校長より提出される調査書により選抜を行うことがある (東大の場合は総定員の約5倍まで) 旨を募集要項に示してきた。東大ではその事態にいたらなかったため、第一次選抜は筑波や滋賀医大と同様、5教科についての客観試験により行われた。それに

表 5 私立の倍率

大学名	47*	48*	49*	昭和50年度			51	52	昭和53年度 ³⁾		
	倍率	倍率	倍率	志願者	合格者	倍率	倍率	倍率	志願者	定員	倍率
岩手医科	17.8	15.6	14.8	1,307	104	12.6	15.1	15.0	1,292	80	16.2
自治医科(47)	39.9	34.7	29.8	4,013	109	36.8	32.0	34.8	3,961	100	39.6
独協医科(48)	—	4.0	3.3	558	129	4.3	4.3	5.2	891	100	8.9
埼玉医科(47)	4.3	4.1	3.4	471	101	4.7	5.1	7.0	1,193	100	11.9
北里(45)	8.1	10.7	7.6	966	126	7.7	8.9	4.9	984	120	8.2
杏林(45)	7.2	6.0	3.7	382	114	3.4	5.0	7.2	1,200	100	12.0
慶応義塾	22.9	36.2	40.9	3,698	77	48.0	42.6	42.7	3,354	75	44.7
昭和	12.4	12.2	10.3	2,031	128	15.9	19.8	23.9	3,410	120	28.4
順天堂	12.2	7.7	7.3	1,092	90	12.1	13.8	17.0	1,258	90	14.0
帝京(46)	9.5	4.8	5.3	667	101	6.6	5.3	6.2	1,242	120	10.4
東海(49)	—	—	5.3	1,045	116	9.0	9.4	9.6	1,634	110	14.9
東京医科	19.3	15.4	19.1	2,496	131	19.1	18.6	18.8	2,714	120	22.6
慈恵会医科	17.0	14.7	13.4	1,830	124	14.8	15.2	15.7	1,819	120	15.2
東京女子医科	4.9	4.6	4.1	542	100	5.4	3.5	5.8	593	100	5.9
東邦	11.0	14.9	17.8	1,569	99	15.8	16.4	17.7	2,385	100	23.9
日本	15.6	9.9	9.7	1,689	160	10.6	14.0	12.7	1,769	115	15.4
日本医科	32.4	28.1	20.6	2,476	100	24.8	29.0	28.7	3,138	100	31.4
聖マリアンナ医科(46)	9.2	5.6	2.8	645	124	5.2	6.3	6.1	1,064	100	10.6
金沢医科(47)	2.3	3.8	3.1	477	122	3.9	3.9	4.4	224	100	2.2
愛知医科(47)*	4.0	2.7	2.8	401	118	3.4	2.4	4.1	388 330	80 20	4.9 16.5
名古屋保健衛生(47)	7.3	7.2	6.4	600	124	4.8	5.2	6.8	1,215	100	12.2
大阪医科	13.2	13.7	19.2	1,983	104	19.1	20.1	22.3	1,544	100	15.4
関西医科	15.1	15.1	11.4	1,777	120	14.8	19.4	17.5	1,795	100	18.0
近畿(49)	—	—	6.9	1,035	120	8.6	11.7	10.0	1,294	100	12.9
兵庫医科(47)	5.5	3.6	3.4	415	122	3.4	6.3	5.7	1,133	100	11.3
川崎医科(45)	3.3	3.3	3.4	370	129	2.9	2.8	3.0	510	120	4.3
久留米	8.0	7.0	7.7	850	132	6.4	6.8	7.3	985	120	8.2
福岡(47)	4.6	4.1	4.9	671	146	4.6	6.5	6.8	988	100	9.9
小計・平均	12.3	11.1	10.3	36,056	3,270	11.0	12.5	13.1	44,307	2,910	15.2

* 53年度は第一次、第二次に分けて行われた

反し、岐阜大学においては、昭和47年以来、毎年志願者が1,200名を大幅に越えたので、調査書を主な資料として、表6に示される人数の第一次選抜が行われてきた。調査書を実質的に活用している点が評価される。

4. 欠席率

昭和50、52年度の欠席率を表7に示す(資料4より筆者が集計)。国立一期と公立とが類似のパターンを呈し、平均約2割であるが、国立二期はそれらの倍、すなわち約4割が欠席している。それらに比し、私立では平均1割前後でもっとも低かったが、0~58.3%に広く分布し

た。日本列島の北と南に欠席率の低い大学がみられ、高い大学は首都圏から近畿地方、すなわち当時の新幹線沿線に所在した。東京医科歯科大が欠席率においても最高を記録した。

5. 入学者の内訳

表8~11に昭和50年度入学者の内訳⁷⁾(現役・浪人別、学士ならびに外国人)、同50、52年度の合格者中の現役%ならびに女子学生数⁴⁾を示す。

1) 現役・浪人

昭和50年度の入学者⁷⁾について、現役と浪人の比率を

表 6 2段階選抜(表2, 3中の△印校)

大学名	年度	志願者	第一次合格者	定員に対する倍率	最終合格者	第一次選抜法	第二次選抜法
筑波 ⁵⁾	49	604	350	3.3	105	客観テスト (5教科 6科目)	記述テスト 3教科5科目 (国・社抜き) 小論文・面接
	51	822	250	2.4	104		
	53	771	248	3.1	104		
東京(理三) ^{4,11)}	50	755	256	2.8	90	客観テスト (5教科 9科目)	記述テスト 4教科8科目 (社抜き)
	51	682	249	2.8	90		
	52	753	246	2.7	90		
滋賀医科 ^{4,11)}	50	592	406	4.0	100	客観テスト (5教科 9科目)	記述テスト 3教科6科目 (国・社抜き)
	51	717	310	3.1	100		
	52	575	308	3.1	100		
岐阜 ^{5,11)}	48	2,592	2,104	26.3	80	調査書	客観+記述テスト 調査書
	50	1,882	1,685	21.1	80		
	52	1,863	1,606	20.1	80		

表8～11の4群の各総数より算出し表12に示した。国立一期と二期はきわめて類似し、現役と1浪の割合がほぼ等しく、両者合わせて約7割を占めたが、公立においては1浪が現役を、私立では逆に現役が1浪をはるかに上回る点が、国立と異なる。2浪は各区分とも10数%を示し、3浪以上も1割強を呈した。

各大学別にみると、各区分の中でもかなり大きな差がみられた(表8～11)。50年と52年の2年間の平均で、現役が約半数あるいはそれ以上を占める大学は、国立一期では、東京、大阪、岡山、九州、同二期では岐阜、公立には存在せず、私立では自治、独協、北里、慶応、順天堂、東京女子、東邦、金沢医科、愛知、名古屋保健衛生、兵庫、川崎などであった。現役比率の低いのは、国立一期では北海道、浜松、滋賀、鳥取、島根、長崎、熊本など、同二期では秋田、信州など地方都市所在の大学が多かった。私立では岩手、昭和、日本医科、大阪医科、久留米、福岡などいずれも2割前後であった。

現役・浪人の比率の差は、受験生の志向と各大学の選抜方法の差によるものと推測される。医師国家試験不合格率と2浪以上の浪人と密接に関係する⁸⁾ことが指摘されており、選抜において検討すべき課題である。

2) 学士入学者

医学校入学者のうち、他学部卒業者の数は昭和46年度50、48年度115、49年度153と増加し、昭和49年度では各大学の平均入学定員の5%が“学士”によって占められている⁹⁾。その要因として医学・医療の側からのニーズもあろうが志願者の脱サラ志向も大きいと思われる。昭和50年度の実態(表8～11)をみると、国立一期、二

表 7 欠席率平均(最低～最高)

区分	昭和50年度	昭和52年度
国立一期	18.8(9.4～26.4)	20.6(6.0～23.7)
〃 二期	42.2(32.6～51.3)	40.0(33.4～54.1)
公立	19.0(11.8～25.8)	19.6(13.7～29.1)
私立	11.2(0.0～58.3)	8.3(1.7～22.3)

期ならびに公立はいずれも1校当たり5～6人に達しているが、私立においては2.2人で明らかに少ないことが判明した。入学金ならびに授業料など経費面の負担が原因と考えられる。学士が入学定員の1割以上を占める大学は、国立一期では千葉、浜松、名古屋、滋賀、同二期では群馬、東京医科歯科、公立では横浜、名古屋市立、和歌山、私立では大阪医科の各大学である。他方学士が0、あるいはきわめて少ない大学も北海道、東京をはじめとして各区分にかなり認められ、とくに私立に多かった。

大阪大学が昭和50年度より開始した、いわゆる“学士入学制度”は、“医進課程を修了した者と同等以上の学力を有する者”を、専門課程で約20名選抜する方式である⁹⁾。他方国大協では上記の医進課程に入学した学士の飛び級も検討され始めている。医学のもつ学問的性格、医療の社会的使命などを考えると、医学部自体のgraduate school化も含め、より高いレベルでの検討がまたれる。

3) 女子学生

昭和50年度の全入学者(7,464名)中、女子学生(927

表 8 入学者の内訳（国立一期）

大学名	昭和50年度						昭和50年4月に在学する外国人総数 (うち女子学生数)	合格者中現役%		合格者中女子数	
	現役	1浪	2浪	3以上浪上	学士	外国人		50年度	52年度	50年度	52年度
北海道	35	38	29	19	0	0	0	29	27	8	3
東北	34	46	19	13	4	0	7(0)	32	39	9	12
筑波(49)	27	31	25	14	3	1	1(0) ^(2学年のみ)	28	48	8	16
千葉	38	40	16	10	16	3	14(0)	33	—	14	7
東京(理三)	58	14	19	0	0	1	4(0)	63	61	4	2
新潟	32	52	17	15	6	0	9(1)	27	35	6	6
富山医科薬科(51)	—	—	—	—	—	—	—	—	37	—	15
金沢	47	50	14	8	3	3	12(0)	39	—	11	12
浜松医科(49)	17	26	29	15	12	1	1(0) ^(2学年のみ)	17	17	9	6
名古屋	39	39	13	8	10	0	4(0)	36	49	7	8
三重(47)	31	42	17	9	3	1	4(0)	27	32	13	9
滋賀医科(50)	26	23	21	20	10	3	3(0) ^(1学年のみ)	26	27	7	6
京都	50	45	13	9	5	3	16(1)	41	46	7	6
大阪	50	33	8	4	5	0	15(0)	50	46	5	5
神戸	39	45	16	10	9	4	20(0)	32	37	12	17
鳥取	32	47	17	20	6	0	6(0)	26	22	8	14
島根医科(51)	—	—	—	—	—	—	—	—	21	—	15
岡山	59	44	12	5	2	0	1(0)	61	40	21	11
広島	50	41	17	12	0	0	13(2)	42	—	13	16
徳島	43	38	17	19	9	4	10(0)	42	38	10	11
九州	61	35	17	11	1	1	13(0)	48	44	7	9
長崎	25	36	23	25	7	0	17(1)	20	33	8	4
熊本	23	39	21	37	0	2	19(1)	19	29	15	17
計	816	804	380	283	111	27	189(6)	—	—	202	227
平均	38.9	38.3	18.1	13.5	5.3	1.3	10.0 ^(全大学を6学年に換算)	32.1	31.7	10.6	9.9

名)の占める比率は12.4%で、国際的に約10%という線をやや上回る程度である。表8～11により昭和50、52年度の実態をみると、国立一期、二期、公立の三者は不思議なほどに1校当たりの数が9.0～11.1のごく狭い範囲に集中しているのに反し、私立では東京女子医大を含めると約20人、それを除いても約17人を示し、前三区分に比して高い。

女子学生数が入学定員に比し多い大学は、国立一期では神戸、岡山、広島、熊本、同二期では弘前、山口、公立では名古屋市大、大阪市大、和歌山、私立では東邦、日本、聖マリアンナ、愛知、名古屋保健衛生、関西、近畿、兵庫、川崎、福岡など、全般的にみると、西日本に多い傾向がみられる。

女子学生の職業人としての歩留まりは、他の領域に比し高いと推定されるが、医学教育に対する公費負担の増大のおりから、女医教育の社会への還元の実態を一度調査しておく必要がある。

4) 外国人学生

表8～11の外国人学生数には在日外国人の子弟で一般の選抜試験に合格した者と、外国人留学生として定員外に入学を認められた者が含まれている。外国人学生の比較的多い大学は、国立一期では千葉、金沢、滋賀、京都、大阪、神戸、広島、九州、長崎、熊本、二期では弘前、岐阜、鹿児島、公立では名古屋市立、京都府立、奈良、大阪市立など、弘前、千葉を除くといずれの区分においても関西ないし西日本が圧倒的に多い。出身地は主

表 9 入学者の内訳（国立二期）

大学名	昭和50年度						昭和50年4月に在学 する外国人総数 (うち女子学生数)	合格者中 現役%		合格者中 女子数	
	現 役	1 浪	2 浪	3以 浪上	学 士	外 国 人		50 年 度	52 年 度	50 年 度	52 年 度
旭川医科(48)	31	30	11	25	3	0	2(0)	33	38	9	12
弘 前	35	49	20	15	3	3	11(0)	29	32	15	12
秋 田(45)	20	29	26	17	0	0	2(0)	23	17	8	8
山 形(48)	38	27	23	11	2	0	1(0)	35	—	11	12
群 馬	34	26	20	8	14	0	7(0)	36	24	6	7
東京医科歯科	29	22	15	5	11	1	9(0)	40	34	8	4
信 州	28	46	16	9	3	1	5(1)	26	23	7	4
岐 阜	37	31	7	3	6	4	16(1)	46	52	5	7
山 口	54	41	14	9	3	2	7(0)	47	41	14	14
愛 媛(48)	47	37	11	5	0	0	7(0) ^(3学年のみ)	46	41	8	8
鹿 児 島	46	43	14	12	10	3	14(0)	40	41	11	13
宮崎医科(49)	34	30	16	14	6	0	0(0) ^(2学年のみ)	32	35	16	7
計	433	411	193	133	61	14	81(2)	—	—	118	108
平 均	36.1	34.3	16.1	11.1	5.1	1.2	7.5 ^(全大学を6学年に換算)	36.1	34.4	10.7	9.0

表 10 入学者の内訳（公立）

大学名	昭和50年度						昭和50年4月に在学 する外国人総数 (うち女子学生数)	合格者中 現役%		合格者中 女子数	
	現 役	1 浪	2 浪	3以 浪上	学 士	外 国 人		50 年 度	52 年 度	50 年 度	52 年 度
札幌医科	13	48	17	18	4	0	0	16	30	7	5
福島県立医科	26	28	14	9	1	0	1(0)	35	29	13	7
横浜市立	12	20	15	8	8	0	0(0)	19	16	10	3
名古屋市立	25	18	10	17	14	1	10(1)	30	32	14	11
京都府立医科	28	46	13	10	4	3	25(1)	27	23	6	19
大阪市立	32	24	13	7	5	3	30(1)	40	34	14	16
奈良県立医科	14	21	12	10	3	0	11(0)	23	34	8	17
和歌山県立医科	24	25	7	3	7	0	2(0)	30	36	9	11
計	174	230	101	82	46	7	79(3)	—	—	81	89
平 均	27.5	36.3	16.0	13.0	5.8	0.9	9.9 ^(全大学を6学年に換算)	27.5	29.3	10.1	11.1

として台湾、香港、韓国なのでその理由として、地理的でないし気候条件、受け入れ校の伝統、在日外国人の居住地域差などが考えられる。私立では北里、杏林、慶応、昭和、東邦、金沢医科、大阪医科、関西、兵庫、川崎に多く、首都圏と関西に集中している。

私費外国人留学生の入学に関しては、昭和47年までは

文部省の統一試験の成績によりほぼ左右されていたが、その後は統一試験協会の実施する数学、理科、英語ならびに日本語の成績を参考とし、各大学が面接などを行い決定している。上記の外国人学生数の多い大学において、定員外に若干名を受け入れているが、そのような措置をまったくとっていない大学が圧倒的に多い。

表 11 入学者の内訳（私立）

大学名	昭和50年度						昭和50年4月に在学 する外国人総数 (うち女子学生数)	合格者中 現役%		合格者中 女子数	
	現 役	1 浪	2 浪	3以 浪上	学 士	外国 人		50 年 度	52 年 度	50 年 度	52 年 度
岩手医科	29	42	22	4	7	1	5(0)	28	22	11	15
自治医科(47)	65	34	9	1	0	0	0(0) ^(4学年のみ)	60	—	5	3
独協医科(48)	61	26	21	21	0	1	6(0) ^(3学年のみ)	47	52	10	20
埼玉医科(47)	30	28	17	24	2	0	1(0) ^(4学年のみ)	30	28	14	16
北里(45)	73	32	14	7	0	3	10(1)	58	48	15	21
杏林(45)	48	35	15	16	0	5	15(0)	42	44	16	17
慶応義塾	68	32	9	4	0	4	10(1)	51	46	6	3
昭和	34	38	28	24	4	1	13(1)	27	21	15	17
順天堂	49	35	5	0	0	2	5(0)	54	—	10	11
帝京(46)	120	11	2	1	0	0	0(0) ^(5学年のみ)	—	36	7	25
東海(49)	53	20	20	14	1	0	0(0) ^(2学年のみ)	40	43	10	18
東京医科	42	49	39	0	1	0	8(1)	32	30	23	12
慈恵会医科	45	46	16	15	3	1	3(0)	36	—	14	13
東京女子医科	71	33	8	2	1	0	0(7)	62	60	100	100
東邦	55	29	10	3	2	3	14(1)	55	44	28	21
日本	65	41	20	21	0	0	2(0)	61	27	25	16
日本医科	20	43	29	17	2	0	7(1)	20	18	17	6
聖マリアンナ医科 (46)	59	32	17	11	5	0	2(1) ^(5学年のみ)	45	44	29	35
金沢医科(47)	57	25	32	0	8	1	12(0) ^(4学年のみ)	47	46	16	18
愛知医科(47)	62	33	13	10	0	2	5(0) ^(4学年のみ)	55	67	15	23
名古屋保健衛生 (47)	50	39	19	16	0	0	2(0) ^(4学年のみ)	41	58	20	20
大阪医科	22	43	25	18	10	1	12(0)	13	22	8	12
関西医科	43	34	25	16	2	4	13(0)	35	33	26	31
近畿(49)	53	20	13	13	5	0	0(0) ^(2学年のみ)	38	51	16	22
兵庫医科(47)	76	28	7	14	1	4	10(1) ^(4学年のみ)	58	55	20	28
川崎医科(45)	94	17	7	9	1	4	9(1)	74	77	13	24
久留米	19	48	32	30	3	1	10(0)	14	23	13	13
福岡(47)	28	40	22	27	3	2	6(0) ^(4学年のみ)	21	26	24	24
計	1,491	923	496	338	61	40	180(16)	—	—	526	584
平均	44.9	27.8	14.9	10.2	2.2	1.4	7.7 ^(全大学を6学年に換算)	42.3	40.8	18.7	20.9

表8～11に示されているように、昭和50年入学の外国人学生の総数は108人、1校当たりの平均は1.3人、過去6カ年に逆上って換算しても、1学年当たりやはり1.3人(529人、70校)にすぎない。その中から在日外国人学生を差し引くと、真の外国人留学生の受け入れは、1大学当たり1名にも達しないことは確実である。これは日本の医学教育に対する評価、留学生受け入れ態勢の不備などが原因と考えられ、国際社会における日本のあり方として、おおいに反省、改善されるべき重要な問題の1つである。

6. 選抜方法

この白書の対象時代の入学者選抜方法における問題点として、まず第一に学力検査偏重、第二に私立医大の寄付金入学(慶応、自治以外)があげられる。

表 12 現役・浪人の比率(昭和50年度)⁷⁾

区 分	現役	1浪	2浪	3浪	計
国立一期	35.8	35.2	16.6	12.4	100.0
〃 二期	37.0	35.1	16.5	11.4	100.0
公 立	29.6	39.2	17.2	14.0	100.0
私 立	45.9	28.4	15.3	10.4	100.0

1) 学力検査偏重の現行選抜方法

50年度の時点での選抜方法の全体像については吉岡¹⁰⁾がすでに総括し表示した。ついで51年度より新教育課程の卒業生に対して文部省より科目数を減らすようとの要請があり、若干の修正が行われたが、大幅な変革は54年度より実施される共通第一次テストまではもたらされなかった。表13に、50年度¹⁰⁾、53年度¹¹⁾、54年度¹²⁾の選抜

表 13 選抜方法の推移

教科一科目数	50年度 ¹⁰⁾			53年度 ¹¹⁾			54年度 ¹²⁾	
	国 立	公 立	私 立	国 立	公 立	私 立	国 立	公 立
5—8	31	5	1	32	5	1		
—7				1				
4—7	2	1		4	3	2	1	
—6		2	13			1		
—5			12					
3—6				1		8	4	
—5			2			13	5	2
—4						3	4	2
—3							3	
2—5							2	
—4							8	
—3							5	3
—2							3	1
0—0							3	
2段階選抜	4	1	24	4	3	26	29	4
面接・小論文	1		21	1	2	19	9	4
面 接	1 (入学後)	2	6	1 (入学後)	1	7	5	
小論文 (上記に適性・性格 テストを併用)	1		1 (2)	1			6	2
推薦入学			1			1		

注：50年度の国語がすべて1科目とされていたため、53、54年度もそれに同調した。国語2科目のため53年度の科目数が上記にプラス1すべき大学が、国立に13校、公立に5校あり、その大半は5教科9科目となる。54年度も4—7の東京が実際は4—8である。

方法を総括する。

53年度までの実態として、吉岡¹⁰⁾も指摘したが、5教科型(国立の大半と公立の5校)ないし4教科型(社会抜き、私立を主とし、国公立の一部)の学力検査主体の選抜が長年続けられてきた。その結果、難問・奇問、ときに愚問もみられ、高校以下の教育に大きな歪を与えるとともに、性格面より医学生・医師としての適性を欠く学生の入学が増加し、医学・医療にも歪が生じてきたことを否定できない¹³⁾。

現行においても、表13のように私立のほとんどの大学において面接が行われている点は国公立より進んでいるが、その目標や方法に不明確ないし不十分な点が少なくない。また学力検査のみではさらに適性への妥当性において、欠けたことは明白である。

2) 私立医大の寄付金入学

私大新設時からもうわきされていた問題であるが、47年度で特別納入金をまったく徴収しない大学3校、1,000万円以上が64%、51年度の文部省調査によると全然徴収しないのは2校(慶応と自治医大)に減じ、1~2,000万円が56.2%、2~3,000万円が31.3%を占め、3,000万円以上も5.2%に達し、5,000万円もみられるにいった¹⁴⁾。昨年一躍社会問題となり、それを契機に学納金の明示、学納金を入学の条件としない、私立医大への国費援助の増額(必要経費の44%となる)などにより、非常識な寄付金入学に一応歯止めがかけられたかにみえるが、それらの措置のみで抜本的に解決することは不可能といえよう。

3) 国公立大学共通第一次試験

国大協では、数年にわたる選抜方法改善検討の成果として、大略つぎのような新選抜制度を決定し、昭和54年度より国・公立大学において施行されることとなった。

1) 共通第一次試験(客観試験、5教科7科目—社会と理科は各2科目選択)により、高校における必須科目の到達度をみるとともに、試験問題の適正化をはかり、高校以下の教育の正常化に寄与することを目的としている。

2) 各大学が行う第二次試験により、学部・学科への適性をみる。学科をできるだけ減らし、小論文、面接、実技などにより行う。

3) 第一次ならびに第二次試験結果、調査書その他の資料を総合して判定する。

4) それを機会に国立一期、二期の区分をなくし、入試期日を一元化する。

日本医学教育学会では昭和50年に選抜検討委員会を発足させ、2年余の検討結果を、昭和52年3月に共通一次

試験との関連における医学系の入学者選抜方法として発表した¹⁵⁾。

そのねらいは、医学・医療への適性者選抜と高校以下の教育正常化への寄与である。その要約は、

第1段階: 医学部・医科大学が求める**学生の資質、履修すべき科目**を募集要項に明示する(進学の選択と指導ならびに選抜のために必要)。

第2段階: **予備選抜**(調査書と共通第一次試験の結果により、定員の約3倍までをとる)。

第3段階: 第二次試験(学科を廃止し、**小論文・面接**などにより適性を検する)。

第4段階: **調査書の評価**(共通第一次試験より高い学習レベルを調査書で判定することにより、学力低下を予防し、かつ試験対策的学習を是正する)。

第5段階: **最終判定→合否判定**

第6段階: **選抜方法研究**

以上の提言は全国的に反響と関心を惹起したが、54年度よりその線にそって実施する大学は筑波、岐阜、佐賀、私立では久留米の4大学となり、なお多くの大学が実施結果を注視している現状である。表13にも示されているように、面接・小論文などを実施する大学がこれに飛躍的に増加した。すなわち国公立46校のうち、過半数の26校、私立も入れると74校中52校(70%)に達し、科目数も約半減した。しかし総じて旧帝大系に共通一次試験の理念に沿わない現状維持的傾向が強く、今回の制度改変の成果を減殺し、制度そのものへの評価を悪くするおそれがある。各大学が一致して新制度を育てるよう努力すべきである。つぎに参考までに科目数と大学名、面接・小論文などを課す大学名を記しておく。

第二次試験教科一科目数と大学名(54年度)

教科一科目(大学数)	大学名
0—0 (3)	筑波・岐阜・佐賀
2—2 (4)	弘前・新潟・愛媛・和歌山
—3 (8)	旭川・群馬・滋賀・高知・宮崎 札幌・福島・横浜
—4 (8)	千葉・金沢・浜松・富山・岡山 熊本・鹿児島・長崎
—5 (2)	三重・信州
3—3 (3)	秋田・島根・大分
—4 (6)	東北・名古屋・山口・徳島・名古屋市立・奈良
—5 (7)	山形・東医歯・鳥取・広島・九州・大阪市立・京都府立
—6 (4)	北海道・京都・大阪・神戸
4—8 (1)	東京

面接・小論文を課す大学

- 1) 面接・小論文 (13): 旭川・福島・山形・群馬・筑波・横浜市立・浜松・名古屋市立・岐阜・和歌山・島根・佐賀・愛媛
- 2) 面接 (5): 弘前・東医歯・山口・大分・宮崎
- 3) 小論文 (8): 札幌・秋田・新潟・千葉・金沢・信州・滋賀・奈良

おわりに

昭和47年より、昭和54年度から実施される共通第一次試験までの本邦医学校における選抜の実態について述べた。この期間は戦後30年の間においてもっとも大きな変動が選抜のうえにも現れ、かつそれをよりよく誘導せんとされている時期といえよう。好ましい選抜への道程はなお長い。しかしこれらのデータが明日の選抜改善を考えるうえに、いささかなりとも参考になれば幸いである。

貴重な資料をご提供頂いた諸大学関係者、福武書店名古屋支社の方々、資料の整理にご協力下さった岐阜大皮膚科森俊二教授、病理学教室河内瑛佐子、同窪田珙子さんにお礼申し上げます。

参考文献・資料

- 1) 斎藤諦淳：わが国の医師養成について。医学のあ

- ゆみ, **95**: 330, 1975.
- 2) 大学資料 45 (1973), 52+53 (1975), 56 (1975), 64+65 (1977) の各号.
- 3) 新聞報道. 1978年2月, 3月.
- 4) 昭和52年度全国大学入試結果資料集. 福武書店, 東京, 1977.
- 5) 筑波大学・岐阜大学資料.
- 6) 中川米造: 日本医学教育の現況. 医学教育, **3**: 26, 1972.
- 7) 医学教育カリキュラムの現状 (昭和50年度). 全国医学部長病院長会議, 1975.
- 8) 額田 粲・高垣東一郎: 学業成績の追跡調査. 医学教育, **8**: 71, 1977.
- 9) 中馬一郎: 学士入学一大阪大学の場合一. 医学教育, **8**: 118, 1977.
- 10) 吉岡昭正: わが国医学校における入学者選抜の現況. 医学教育, **8**: 65-70, 1977.
- 11) 昭和53年度全国大学入試科目一覧. 福武書店, 東京, 1977.
- 12) 昭和54年度国公立大学第2次試験科目一覧, 同上, 1977.
- 13) 尾島昭次: 入学者選抜における諸問題. 医学教育, **8**: 62, 1977.
- 14) 尾島昭次: 私立医大の寄付金入学をなくすために. 朝日新聞 (文化欄) 7月20日, 1977.
- 15) 日本医学教育学会選抜検討委員会 (尾島昭次委員長ほか9名): 医学部・医科大学における入学者選抜方法一とくに共通第一次試験と関連して一. 医学教育, **8**: 131, 1977.

* * *